

Institute for Language Education  
Aichi University, Nagoya

# Goken News

No. 3 September 2000



## 映画広告が大衆文化の開放を語る

(韓国アソシエイトアソシエイト)  
キム・ヨ (ガン・レス) (韓国), (青春伝) (韓国), (アムステルダムADR1) (4/8/controversial Movie), (アメリカン・ビューティ), (ジャック・ダイク) (アメリカ)

## CONTENTS

### ◆特集 アジア

- ・成人打診  
(藤原 聡) ..... 2
- ・小説「太白金星」  
(宇石 希聖) ..... 3
- ・台湾の政変交代に思う  
(渡 英治) ..... 3
- ・資金の海から想射の日へ  
(マウン・ミン・ニョウ) ..... 7
- ・Golden Week Journey  
(ジョン・ハミルトン) ..... 9
- ・英国の地名  
(安藤 聡) ..... 11

### ◆外国語コンテスト

- ・英語部門
- ・ドイツ語部門
- ・フランス語部門
- ・中国語部門
- ・韓国・朝鮮語部門
- ・日本語部門
- ・日本語コンテスト入賞者  
第一位 日本が好きなところを探いなところ  
(法文学二年 李 勳芬)  
第二位 日本人のコミュニケーション  
(現代中国学二年 山 梨子)



2000年5月～7月、韓国のマサン(馬山)市で、第12回馬山国際演劇祭が開催された。今回の演劇祭においては、韓国・ロシア・モンゴル・日本の13の劇団が参加し、日本からは劇団SAKURA前戦・内田るり舞踊団・織茂秀子が参加し、このうち織茂さんの公演に同行する機会を得た。

## 馬山市

韓半島(朝鮮半島)の南端に位置するマサンは、首都ソウルからは高速バスで約5時間、プサン(釜山)のキムヘ(全海)空港からはバスで1時間の場所にある港湾都市である。町の西側はなだらかな丘陵に囲まれ、町の東側がマサン湾であり、約100km先には対馬を望む位置にある。

マサンというと、梅鮮料理の中でも「アグチム(アンコウ)」料理が有名であり、特に市内のオンドン地区では食堂・レストランのメニューに「アグチム」の名前は欠かせない。大きな皿に盛られた15000ウォン(日本円で約1500円)のコースを試食してみたが、見た目よりさっぱりとした辛さが美味しく感じられた。

また市内には、中心街に大宇百貨店が1つあり、町の大きさや雰囲気などはどことなく豊橋の町に似ている。ただ違っている所は、街の看板がすべてハングルであることと、黄色のタクシーが、かなりのスピードで走ることである。さて、“暴走タ

クシー”に乗って、演劇祭の会場の一つであるカトリック女性会館に向かった。

## 「旅人打鈴」

織茂秀子さんの一人芝居「旅人打鈴」(栗木英章・織茂秀子作、木崎祐次演出)の公演は、日本における99年6月(平針小劇場)、10月(名古屋主税町教会)などの公演に次ぐ三度目の公演であり、今回は韓国語による初の上演となった。カトリック女性会館の会場には、女子高校牛を中心とする若い観客層が大勢集まり、また名古屋テレビ、韓国KBSやMBCなどの取材もあって、午後3時および7時の公演はともに熱気に包まれた。

「ナグネ(旅人)」とは旅行者・エトランゼの意味であり、また他郷にいるよそ者という意味も含んでおり、この劇は故郷(朝鮮)へ帰れなかったある老女(元従軍慰安婦の女性)の「タリオン(打鈴;語り)」を主題としている。

物語は、1944年長野県松代の大本営移転の工事に潮る。当時、日本政府は、この地下壕工事のために、朝鮮で強制徴用を行い、またその際、女性を慰安婦として日本へ連れてきた。この劇では、慰安婦にされた女性が、苦しく、切なく、無念の思いを、同じ境遇で梅に身投げした妹の心情に重ねて、過去を一人振り返るという設定である。

劇がはじまると、主人公の女性の望郷の念が、見ている観客の心に伝わり、また主人公の境遇とその心情が、織茂さんの迫真の演技によって、みごとに引き出されていた。公演の前には、大騒ぎ



リハーサル風景(中央が織茂秀子さん:馬山カトリック女性会館で、2000年6月)

をしていたマサンの高校生たちも、じっと劇に見入り、「ヨンヒ！（妹の名前）」と叫ぶ主人公の姿は、多くの韓国の女性観客の涙をさそった。

## 日韓文化交流

今回の馬山国際演劇祭における日本の演劇公演は、韓国における文化開放政策の一環である。韓国では、98年10月にキム・デジュン（金大中）大統領が「日本文化の開放」を正式に表明して以来、韓国において、日本の大衆文化のうち、映画・ビデオ・出版などの間放が始まり、続いて歌謡曲・アニメーションなどの開放が始まった。演劇の開放もこの流れに沿ったものである。

まず映画では、98年、北野武監督の映画『HANA-BI』が韓国における日本映画の輸入第1作となり、映画『Love Letter』などのヒットを経て、2000年の5月からは、映画『Shall we ダンス?』がソウルなどの都市で大ヒットしている。また音楽においては、98年、韓国で沢知恵が初めて日本語の歌をコンサートで歌うこと許可されたのを機に、99年にはキム・ヨンジャが美空ひばりなどの歌謡曲を初めて韓国のコンサートで歌った。

一方、演劇においては、85年つかこうへい、93年の平田オリザの韓国語公演を経た後に、99年に韓国における日本語の演劇公演「売春捜査官」（つかこうへい）が許可された。今回で12回を数える馬山国際演劇祭においては、91年から日本の劇団が参加しているが、日本語公演が公式の場で認められるようになったのは、ここ一、二年のことである。それゆえ、今回の織茂さんによる公演も、日韓の大衆文化交流に少なからぬ役割を果たしたといえる。演劇祭を主催した劇団馬山のイ・サンヨン（李相龍）団長によると、来年はさらにアジア演劇交流の輪を広げ、中国の劇団の招待を検討しているとのことであり、また李団長からは中国の現代劇（話劇・新劇）の状況を尋ねられた。

マサンからの帰路は、プサン（釜山）のキムへ空港から福岡空港を経て名古屋へ戻ることになった。飛行機に乗るとすぐに熟睡する癖のある私は、座席シートを後ろに倒そうとすると、座席を元の

位置に戻すようにとのアナウンスがされた。すでに飛行機は対馬海峡を越えて着陸態勢に入っていたのである。福岡空港に到着した時、時計をみると、プサンを出発してから30分も経過していなかった。

「あまりに近すぎて、あまりに知らなすぎる」日韓相互の文化交流の雪解けは、織茂さんのように、人と人の交流がら始まることをあらためて痛感した。2000年8月に予定されている韓国のテグ（大邱）における織茂秀子さんの公演に期待したい。



オ スジョン

映画広告『오! 수경』(韓国映画)『Shall We ダンス?』(日本映画) (ソウル江南シティ劇場、2000年6月)



韓国文学史上最大の話題作と言われる『太白山脈(全10巻)』の日本語約が昨秋出版されている。

チョ・ジョンネ ユン・ハクジュン  
<趙廷夾(尹学準監修、川村湊校閲、筒井真樹子他訳)『太白山脈』集英社、1999年10月~2000年6月:原作『태백산맥』全10巻、1986>。韓国では出版以来500万部をこえる超ベストセラーとな

り、貸本屋なども含めると国民の半分に相当する2000万人が読んだと言われる。また1994年には映画化され、日本のNHK・BS放送でも字幕入りで放映された。監督は「族譜」「曼荼羅」「シバジ」「アダダ」「風の丘を超えて——西便制」「祝祭」など  
イム・グオンテック  
で有名な世界的映画監督・林権澤氏。

実は今回この場を借りて、アジア・韓国・日本の歴史と文化に興味を持つ学生諸君に、この『太白山脈』の小説なり映画なりを是非すすめたいと思って筆を執った次第である。

## 〔二〕

ところで、この作品が韓国で上のごとき話題と評判をよび日本語にも翻訳されたのは、この小説の主題が1945～1953年頃という韓国史の言わば「謎多き時代」を扱っているからである。しかもこの8年間は、アメリカ・ソ連・中国・北朝鮮・韓国そして日本が深くかかわり、その点では同時に世界的レベルでの「問題多き時代」であった。

では、この1945～1953年とは一体どのような時代であったのか。この点を、当時の南朝鮮（韓国）  
ボルギョ  
の南部地方にある筏橋という農村の視点から、小説という具体的形式を借りて描こうとしているのが『太白山脈』に外ならないのである。本書の日本語訳、第一巻の表紙カバーには「封印された歴史が今、解き明かされる！！」と、ジャーナリスト的な見出しが附されているが、これは決して誇張ではない。"1945 1953年とは一体どんな時代であったのか"というテーマに対し、歴史を歪曲せず良心的に答えた韓国人の多くは、「活動停止」「逮捕」「投獄」されて来たからである。例えば、「このテーマ」を論説形式で描いた最も秀れた  
イ・ヨンヒ  
作品<李泳禧（高崎宗司訳）『分断民族の苦惱；韓国現代社会叢書1』御茶の水書房、1985>があるが、韓国の代表的ジャーナリストであり、かつ漢陽大学新聞学科教授も務めた著者は、まさしく「このテーマ」に対する正しい見解公表の故に「活動停止・逮捕・投獄」され続ける。朴正、全斗煥、盧泰愚と三代にわたる軍事政権下では別に珍しくもない現象であった。韓国近・現代史の雄、高麗

カン・マンギル  
大学姜萬吉教授も同じ経験をしてこられた。

## 〔三〕

改めて問いたい、「1945 1953年とは南朝鮮（韓国）にとってどんな時代だったのか」。第一にそれは、日本定刻の植民地から開放され（1945.8.15）、同一民族による朝鮮戦争が終結（1950.6.25～1953.7.25）するまでの時代であった。皮肉なことに、日本にとっての「終戦記念日」はアジアの多くの国々にとってと同様、韓国でも「祝祭日」である。8月15日は「開放記念日」「光復節」と称され、会社も役所も学校も休み、家々やアパートには国旗が立てられる。1945年8月15日、日帝植民地の終結と開放を朝鮮半島は歡喜し、「万歳!」を連呼しながら街々をねり歩いた。目の前に民族の独立と自由を見ることができたからである。ところがその後、気がついてみると民族は南北に分断され、しかも北が南を侵略し数百万人の死傷者を出す朝鮮戦争（韓国では一般に「6.25」と、  
ユ・ギオ  
1950.6.25の日付で呼ぶ）が始まるのである。1945～1953年とは先ず第一に、開放から朝鮮戦争までの時代だったのである。

第二に、では上の「～から、～まで」の間には何があったのか、ということになる。万歳!」を叫んで街をねり歩いたその10日後、アメリカ軍は  
インチョン  
仁川に上陸し、北緯38度線に基づく米・ソ両軍の分割占領を発表し、同9月7日アメリカ軍司令部は南朝鮮（韓国）に軍政をしきこれを支配する旨を布告する。つまり韓国は1945～1948年までの3年間、米軍政府の支配化に置かれ、しかもソウルの北方数10キロ以北はソ連軍に統治される共産主義国家北朝鮮が同民族分断国家として横たわることとなる。いわゆる東西冷戦構造の犠牲として朝鮮半島は真つ二つに分断される。このあたりは学  
ぶた  
生諸君もよく知っていると思う。

## 〔四〕

しかしあまり知られておらず、また意図的に隠された点も多い。上の時代における具体的な韓国人の姿がそれであり、アメリカ軍による軍政の実

イ・スンマン

態、及び初代大統領李承晩の独裁政権の実態とそれに対する抗争事件の数々である。紙面の制約のため、ここではその一部の大枠しか述べ得ないが、まずアメリカ軍政の失策について。米軍政は、こともあろうに日帝植民地時代のいわゆる「親日派」を軍と警察と政府と経済面の重要なポストにことごとく復職させた点。「親日派」とは、日帝植民地時代に日本人の手先となり、同一民族である韓国・朝鮮人を苦しみ搾取した者たちに韓国・朝鮮人がつけた名である。「親日派」は富と地位と安定を得るため、日本人とツルンで、韓国・朝鮮人を支配し敵に回した者たちであり、人数的には警察分野に一番多く、地主や国会議員の大多数もそうであった。彼らは日帝と戦う独立闘争の志士たちを捕え、思想統制を行ない、日帝植民地化に積極的に参加しこれを推進させた。上述の李泳禧氏は、およそ植民地国家というものは解放後はそれに協力した者達を現職から退かせ、そうして新しい体制を打ち立ててこそ真の独立に向かうはずだと述べている。「解放」後、日帝の手先となった「親日派」たちは逃げまどい保身に苦慮する。ところがアメリカ軍政は、彼らの大部分を元の職につかせ、逆に独立闘争の志士たちを排除したのである。民心がアメリカ軍、および当時の政府から離れるのは当然である。そのため南の知識人や良識派の多くの人々は反・米、つまり共産主義をむしろ思想としては受け入れてゆくのである。『太白山脈』でもこうした人物、つまり日帝の手先となり、次は米軍の手先となり富と名誉と地位を確保し続ける人物が登場する。——そして何よりも当時の「良心」とも言える中道派も描いている。小説の中では主人公と目される人物「金範佑」<sup>キム・ボムウ</sup>。中道派は現実の歴史では、金九氏に代表される。彼らはアメリカ対ソ連中国というイデオロギー対立を否定し、共産主義もアメリカ型自由主義も退け、従って南北分断それ自体に反対する勢力であり、朝鮮半島全体の統一と朝鮮半島独自の政体を願った「良心」たちである。北の金日成にはソ連と中国というバックがあった。しかし金九先生には代表される中道派には何のバックもない。従って現実

の政治の舞台では始めから勝目はない。彼らを中道派と呼ぶのは、アメリカ派でもなくソ連派でもなく、「朝鮮民族全体の独立と統一政治」を願ったというまさしくその故であった。

〔五〕

李承晩政権下、少なくとも100万人の韓国人が「アカ狩り」の名の下に粛清・虐殺されたことが今日の勧告では公然と言われ始めた。北の金日成政権下では、おそらくこれをはるかに上回るであろう。これが朝鮮半島の1945年以降の実態の一部である。無力な中道派の良心はことごとく打ち碎かれ、そのみがその多くは李承晩・金日成政権下の粛清・虐殺の対象とされてしまった。金九先生の暗殺は、その象徴にすぎない。——しかし今や、ソ連が崩壊し、南北統一が叫ばれる状況下において、この時代の良心・中道派こそが再び顧みられるであろう。何故ならば、南北に共通する政治思想体系は、まさしく南北を超越しようとした金九中道派にその歴史的原型を認めるからである。卑近な表現を用いれば、何らかの意味での南北統一後のスーパースターは金九先生しかいないのである。かくして「1945～1953年をどう見るか」という問いは、一つの歴史的認識にかかわる問いであり、今も朝鮮半島が背負い続けている問いなのである。小説『太白山脈』は、そのことを私たちに伝えてくれる。



小説「太白山脈」

## 台湾の政権交代に思う

現代中国学部  
黄 英哲

いま、台湾の政治は熱い季節を迎えている。今年春に台湾で行われた第二回直接民選総統選挙の熱狂ぶりは日本のマスメディアでも伝えられたが、ある意味で硬直化した日本の政治状況とはうらはらに、台湾の政局はいままさに激動期を迎えており、台湾人の政治にたいする関心は非常に高い。今回の総統選挙における投票率が80%を上回ったこともそれを裏付けている。

蒋介石、蒋経国、李登輝と半世紀以上にわたって連綿と続いてきた与党国民党時代に終止符が打たれ、民進党の陳水扁候補が中華民国第10代総統に当選した。考えてみれば、かつて中華世界において、これほど民主的なプロセスを経て、政権交代が行われたことはなかった。歴史と文化を共有する隣人の中華人民共和国でさえ、いまだに中国共産党一党独裁体制のもとにあり、民主化の成熟にはなお一層の時間を要する。

5月20日の総統就任式では、陳水扁新総統が「台湾人民」にたいして総統就任の宣誓を行ったのを、私は日本から特別な感慨を持って見守っていた。陳水扁政権の閣僚たちの姿のなかには、かつて反政府勢力として政治的弾圧を受けたことのある顔ぶれも見られた。

台湾は第二次世界大戦以前、日本の植民地統治下にあった。しかし、戦後、国共内戦下で毛沢東に敗れた蒋介石は台湾に逃れ、国民党支配体制を築いた。もともと台湾に住んでいた「本省人」と呼ばれる人々は、日本による支配が終わったと思っていた矢先、今度は蒋介石国民党政権とともに大陸から渡ってきた「外省人」たちの支配下に

置かれることになったのである。それ以降、1980年代の民主化の時期に至るまで、台湾は国民党一党独裁のもとにあった。それは封建ファシズムそのものであり、政府が台湾人を弾圧するという血なまぐさい自虐テロが幾度となく繰り返され、民主化運動を求める多くの本省人たちが歴史の間に葬られてきた。台湾で生まれた本省人は、同民政権下で長きにわたって政治的従属を強いられてきたのである。

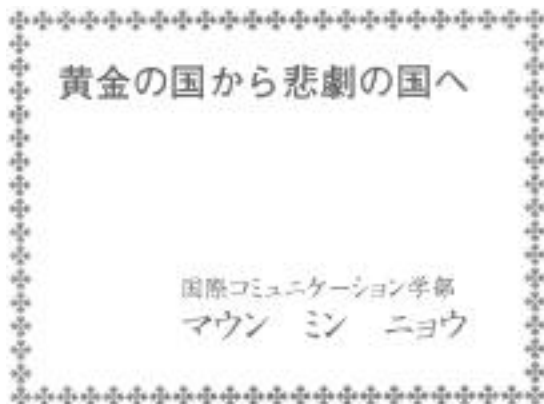
そして、2000年を迎えた台湾では、政権交代がなされ、かつて国民党政府によって弾圧を受け、国家反乱罪というレッテルさえ貼られていた民主化運動に、弁護士として参加した民進党の陳水扁氏が、台湾人民によって給統に選出された。車椅子姿で陳水扁に寄り添う新総統夫人は、かつての政治テロによって両足の力を失っている。

国際社会は、台湾独立を標榜する民進党からの新総統の誕生に戸惑いを覚え、中国への刺激に最大限の考慮をするとともに、台湾の独立を封じ込めようと遇刺反応しているようにさえ見える。その一方で、台湾人の民主化運動の最先鋒を歩んできた一員である新総統夫妻のこれまでの足跡を見れば、本省人を中核とした台湾人がなぜ、独自の色彩を以ってその存在感を打ち出そうとしているのかという動機については、ご理解頂けるのではないだろうか。しかしながら、その動機がまるで台湾が国階社会のトラブルメーカーそのものであるかのように扱われるのはいささか遺憾である。台湾は一度たりとも自らトラブルメーカーになろうとしたことはない。むしろ台湾は、中台間の対立が東アジアの安全保障に大きな影響を及ぼすことになるという点を十分に理解している。陳水扁総統が就任演説において「中国が武力行使しない限りにおいて、台湾は独立しない」という、条件付きながらも民進党の存在意義そのものにも関わる「台湾不独宣言」を公式に行ったのも、この点について十分考慮していることの表れである。

それにしても、総統選挙直前に台湾を「同胞」と呼びつつも、台湾をこれ見よがしに叱責し、激しい口調で憎悪の念を露にした朱鎔基首相のこわ



ばった表情を、私は忘れることができない。中国と台湾が本当に「家族」であるとしたら、中国の乱暴な行動は「家庭崩壊」をまぬがれない。さらに言えば、「家庭内暴力」は、「家族」の不和のみならず、「社会」にも悪影響を及ぼすことがしばしばあるものである。むしろこのことのほうがより一層深刻な問題ではないだろうか。東アジアの真のトラブルメーカーは誰なのか、敢えて大きな声で叫ぶ者はいないが、物事の本質は見失ってはならないのではないだろうか。



ミャンマー連邦同（旧ビルマ）は大国の中国とインドとの間にある。人口は日本の4割くらいで、面積は日本の1.8倍の大きさである。多民族国家でビルマ族は全体の7割くらいをしめている。宗教は9割の国民が小乗仏教を信仰している。現政権は軍政であるが、ASEANのメンバーにもなっている。

1962年から軍政の下で閉鎖的国家となり、世界からは知られざる国となった。この政権と政治体制のために、発展から遠ざかったと体験から理解できる。政治参加することは軍の政党にだけで許されているので、国民の政治感覚は狭くなる。それでわたしは海外へ出ることを決心した。

来日して8年目、1989年に祖国の国名はビルマからミャンマーに変わった。新国名になり11年目になった。長期間海外に住んでみたら、人間は動物の仲間とは違うことがわかる。動物のすることは限られている。人間にはある時代や場所できないことが違う時代と場所であればできるよう

になる。私もミャンマーでできないと思っていたことが日本でできるようになり、海外から祖国をよく見ると、ミャンマーで見えなかったことやミャンマーの実像が見えるようになり、分からないことがわかってくる。不思議である。

ミャンマーにいる間、勉強は出来ないと思ったけれども、来日して一生懸命勉強してみたら変わってきた。1988年ビルマで民主化運動が起こって来たとき、ミャンマーの政治と社会構造をもっと知りたくなり、理系から文系へ転身した。祖国の問題をもっと探ってみようと思決心した。

山口洋一・駐ミャンマー元大使が、「軍事政権は国名を本来のミャンマーに戻し、安定的な政治制度の確立と市場経済導入による、自由で開放的な体制にもとづく、経済近代化を目指して国造りの努力をしており、着実に成果をあげてきている。今やこの国はネ・ウィン時代の停滞から脱皮して、近代に国家へと躍進する途上にある。」と書いている。しかし、私が調べてみたところ、ミャンマーの政治的、歴史の実像は下記ようになる。

2-3世紀のビルマではピューの時代があった。このピュー王国を「平和の国」と中国の旅人たちは書いた。11世紀にパガン王朝になって、周辺の国々は統一され、ミャンマーの国になった。文語でミャンマー、口語ではバマーである。しかし、16世紀には欧州の冒険家たち、特にポルトガル人が来てから国名は西洋の国で「ビルマ」として知られるようになった。19世紀に英国と3回の戦争があつて、ビルマはそれ以降英国の植民地になった。英国はミャンマー語の口語に近い発音であるバマーと言う国名を便った。世界にバマーは「黄金の国」、すなわち、「陣の国」、小乗仏教の国と言われるようになった。

伝統の君主制の時代にも、一般の国民には自由に売買ができる土地の所有権があつた。「血生臭い専制主義」と西洋の歴史学者たちは言っているが、実際は仏教思想にもとづく人間的な政治体制も見られた。英国の下では「米の国」となった。どの時代でも国民は物質面と精神面での豊かさが多少あつた。

第2次大戦中、ミャンマーは日本の占領地になり、国民は初めて苦い経験をした。現軍政の政治的なルーツが初めて出来た時期でもある。戦後1948年にイギリスの支配下から独立。冷戦の影響でミャンマーにも内戦があった。しかし議会制度と自由経済の陣営が勝利し、アジアで最も豊かな国の一つとして急成長した。

1962年にネウィン將軍率いる軍隊がクーデターを起こし、彼の軍政、そしてビルマ式社会主義の思想での一党独裁政権となり、現在も軍政が続いている。

さて、山口氏は現軍政の国家平和発展評議会（SPDC）において、「軍事政権 = 悪王」ではないことを強調したが、40年間の独裁政治のせいでミャンマーは世界で一番貧しい国となった。国民は囚人のように苦難にたたされている。今は様々な問題を抱えている。すなわち、麻薬、人権、民主化、教育である。そして「悲劇のランド」と言われるようになった。

なぜこのような問題ができてしまったのか。原因は何か。

現軍政は、イギリスの植民地主義、すなわちビルマで行なわれていた分割統治制度の結果だと言う。その政策はビルマ族が住む平地には近代的行政を、少数民族の山間部には伝統的王政を行なった。独立後、民族分離主義が広がり、国家は分断の危機に直面しているので、軍政が必要と強調している。そして、未来の憲法に、民主国会の議席に軍人が4割関与すべきと要求している。

ミャンマーの政治史を調べて見ると、君主制の時代の行政は、山間地、平地と辺境地がそれぞれ異なった。分割統治政策と似ている。もちろん、ミャンマーの問題点の一つとして、植民地主義の影響もある。特に平等に教育を受けられる、伝統的な寺院を中心とした教育制度を崩壊させて、近代教育を進めて行ったけれど、都市部中心的教育だけで行った欠点も大きいと思う。しかし、「すべてを悪として断罪」することは間違いである。実際は軍政すなわちネウィン政治を改革できないことがキーワードとなってくる。これを理解しな

かったならば、軍政を認めてしまうことになる。

多民族国家形成のため不正な路線に陥っていることを、下記にある図1のSPDC政治思想は明確に示している。悪循環に陥ってしまっていることがよく分かる。彼らが強調しているのは、ビルマ族と少数民族との統一は植民地主義者の下で崩壊されたということである。それを育成するために、下記の図にある肥土のような「よい意向」と「正直十誠心誠意」が必要である。この土地に愛国心が出てくるとき、国家という樹木が育つようになる。木の根が「連邦性の心」で、幹が「ミャンマー連邦国」で、そして枝は国民の居住地で州と管区になる。これは彼らの論理である。この論評では狭いナショナリズムの壁を超えられないと思う。実際、彼らの政治は反植民地主義、反欧米、そして独裁国家の支持者だけにとどまってしまう。

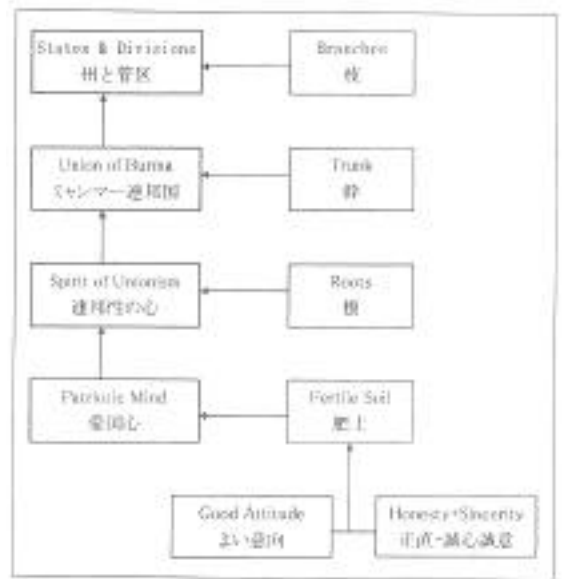


図1 国平和発展評議会の政治思想1

もう一つのキーワードはネウィン政治の中央集権制である。現軍政（SPDC）とネウィン政権の政治本質はあまり変わっていないことが下記の図で明らかである。図2と図3を比較すると、BSPP（ネウインの政党）とSPDC（現軍政の評議会）の組織名だけが違う。経済では自由経済と言っている。実際は民間セクターは発展して来たけれど、軍情報局の管理があって、本来の自由経済には



なっていない。彼らの政治をわかってくればくるほど、軍政はなぜ民主化、人権、自由に抵抗するかが理解できる。結局、ミャンマーの政治発展と経済発展をさせるためには、最初の出発点は軍情報局を中心した政治構造を崩壊させること、三権分立を確立することである。マスコミを自由にさせ、また軍人が政治に関与できないように軍隊を改革することである。そして、連邦国家の形成のために地方分権を行うことである。これらをしていない限り、ミャンマーが問題の悪循環から脱度することは出来ないだろう。

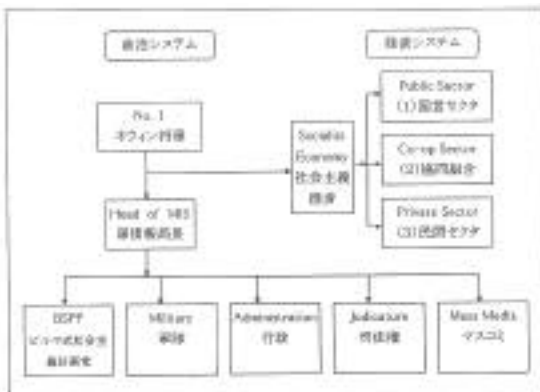


図2 ネウインの政治（1962年1988年まで）

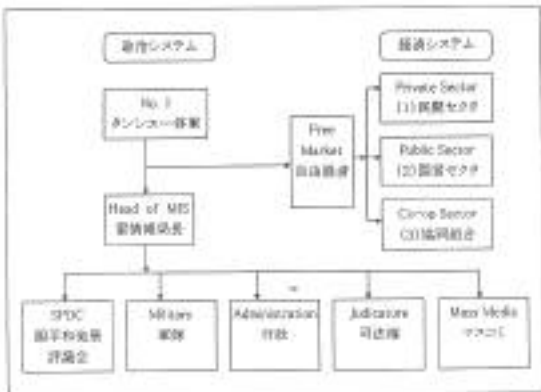


図3 現軍政（SPDC）の政治（1988年—現在まで）

1 New Light of Myanmar (ビルマ語の新聞)  
The Spirit of Unionism, P5, 7 April 2000 to 11  
February 2000 (series, 36 articles)



This year I went to visit Guizhou (貴州) during Golden Week. There is a direct flight from Nagoya Komaki to Chongqing (重慶), and from there I took a night train down to Guiyang (貴陽). There were three things that I wanted to find out more about. The first was to learn about beekeeping (養蜂) in Guizhou. Secondly, I am interested in indigo dyeing (藍染め) and Guizhou is well known for this. And thirdly, I wanted to learn more about the Long March (長征?).



I had a friend in Guiyang who I had met at a beekeeping conference a few years ago, and he was very welcoming. When I first arrived we went by car to visit the zoo in Guiyang. He had worked in this zoo for ten years looking after the camels and monkeys during the Cultural Revolution. He told me that his father had died in prison in 1971. The Cultural Revolution in his opinion had been a terrible mistake. Next we

drove out of Guiyang to the north to visit his factory. At the factory they were making medicines and face creams using pollen collected by bees. The most successful product was an ointment called Fuzhiqing(痔清) to cure itchy feet and piles. It is advertised all over China and the company seemed to be prospering. Later he took me to his new flat on the top floor of an apartment building in the centre of Guiyang. There was no lift so we had to walk up the eight flights of stairs. The flat was like a palace with about eight large rooms and a fine view of Guiyang from every window. It is my impression that these days every city in China is coming to look like Hong Kong. Carpenters were still working on the flat under the watchful eyes of his wife. And I met his son and the son's girlfriend and we all went out to dinner together, leaving his wife watching the carpenters. The following day they were all busy, but the company driver took me out to visit the Huang guo shu pu bu(黄果树瀑布) in Southwestern Guizhou. It is China's biggest waterfall. For me it was interesting to see the countryside. The oilseed rape(なたね) was about to be harvested. There were delicious strawberries for sale at the roadside. Many people were working in the fields planting rice. I saw no tractors at all, only waterbuffalo(水牛) and oxen. I saw some bees which were collecting honey from the acacia. But most of the professional beekeeping companies had moved their hives north into Sichuan (四川).

From Guiyang I went up to Zunyi(遵义) which is an important place in recent Chinese history. At the beginning of the Long March in 1934 when the Red Army broke out of Jiangxi(江西), the leaders were Russian trained and members of Comintern, men like the German Otto Beraun for example. The Red army spent a long time in Guizhou. They wanted to go north but there were

only a few places to cross the Yangtze(长江) and there were shielded by Chiang Kaishek(蒋介石). At Zunyi there was a famous meeting in January 1935 when Mao Tsetung (毛泽东) was invited onto the Central Committee, and it was from that time on that Mao and Zhou Enlai(周恩来) were the leaders of the Chinese Revolution. I went to visit the meeting place called the Huiyi Huizhi(会议会址) and also to the house where Mao stayed. Zunyi is a beautiful town with big parks and clean streets and friendly people. I felt that the Communist Government in Beijing has good feelings towards Guizhou and Zunyi. While I was there I bought a bamboo basket in the market and also a bottle of 'Kweichow Maotai'(贵州茅台), the most expensive firewater in China.



KWEICHOW MOUTAI. Spring 1971 saw the World Table Tennis Championships hosted by Japan in Nagoya.. This was the beginning of 'Pingpong Diplomacy.' 1972 saw Zhou Enlai and US President Richard Nixon toasting each other with three successive cups of Kewichow Noutai.

I went by bus from Zunyi back to Chongqing. I was told that I should go by train because there was no road. But there were buses so I guessed there was probably a road. The next morning I set off at cockcrow. It was about 350 kilometers of unpaved mountain roads. The bus raced along mountain ridges with precipices on both sides. I thought that if this was to be my last day in this

world, at least it was a good day. I think that this part of China has been closed to foreigners until recently. Certainly several people said to me, "This is the first time I have ever spoken with a foreigner." Three times the bus had punctures and each time we stopped in a village and it took about 45 minutes to repair the tyre. There was no spare wheel. In one village they put 100 ducks on the roof, in bundles of ten (tied by the legs). While the punctures were being repaired, the ducks quacked on the roof. The people were very friendly and their farmhouses were large and beautiful. Again I didn't see any tractors. But I did see log hives hanging under the eaves of some of the farmhouses. When at the end of the journey I reached Chongqing at 10pm, I was looking forward to a hot bath. But at the hotel where I stayed, when I turned on the tap the water was cold, only cold.....The next morning I had to get up at 5.30 again to catch my flight back to Nagoya.

I needed more time. One week was not long enough. 40 million people live in Guizhou. Economists say that this is a very backward part of China, But my impression was that it is not so far behind the rest of China. Guiyang is a modern city with highways going out in all directions. As I said it looks like Hong Kong. Zunyi is like Okazaki in Aichi. The villages may not have so many tractors but in several places I saw television disks on the rooves of the houses. The people seemed to be well fed and cheerful. I wanted to learn about indigo dyeing. Mao put all of China into indigo dyed uniforms during the Cultural Revolution. And I learned later that Mao had liked to sleep in a bed with indigo dyed sheets. But I had no time to visit the villages of the minority peoples in southeastern Guizhou where most of the indigo dyeing takes place. But I want to go there again. It is a beautiful

place and I liked the people.



突然だが、豊橋とケンブリッジ（正しくは「ケインブリヂ」）は似ている。何故なら、「豊橋」という地名の由来は「豊川に橋が架かっている場所」ということであり、同様に「ケインブリヂ」は「カム川に橋が架かっている場所」が原義だからである。ついでながら「オクスフォード」は「牛が歩いて渡る浅瀬」を意味する。あの辺りではテムズ河の水深が、牛でも歩いて渡れるほどに浅くなっているのだ。

英国、特にイングランドの地名は、ある程度の知識があればその由来を容易に解読でき、それによってそこがどんな場所かを、さらにはその土地の歴史をある程度知ることが可能である。例えばマンチェスター、ウィンチェスター、チチェスターなど、「チェスター」が付く街は大抵、紀元前50年頃から西暦400年頃までの間ローマ人がブリテン島を支配していた頃に建てられた城下町である。「チェスター」は古期英語で「ローマ人の拠点」を意味する 'ceaster' が変化したものだからである。ランカスター、ドンカスターなどの「カスター」もこの 'ceaster' のヴァリエーションの一つであり、これらもかつてローマ人が城を建てたことから発展した都市である。

世界七不思議の一つにもなっている古代巨石群の遺跡ストーンヘンジの最寄りの都市として観光客を集めるソールズベリー、中世の時代に巡礼の目的地だったことで有名なカンタベリーなど、「ベリー」で終わる名前を持つ街の多くは、ローマ人

が引き上げた後にブリテン人が作った城下町である。この場合の「ベリー」は古期英語で「砦」（城には砦が不可欠である）を意味する 'burgh' の変化系の一つであり、したがって最後に 'burgh'、'borough' 或いは 'brough' が付くエディンバラ、ピーターバラ、ミドルズバラなども同様である。北海に面した美しい町スカーパーラの市について詠ったイングランド民謡「スカーパー・フェア」はサイモン&ガーファンクルがリメイクして1970年代に世界的に知られるようになったが、この曲が日本語で「スカボロー・フェア」と表記されたため（S&G自身がそう発音している気がする）、スカーパーを「スカボロー」と誤記しているガイドブックをよく見かける。ドイツ、オーストリアあたりにはハンブルク、ザルツブルクなど「ブルク」が付く街がいくつかあるが、これは「ベリー」「バラ」のドイツ語ヴァージョンだ。古期英語が当時のドイツ語の一方言から変化発展して成立した過程を考えれば、この類似の理由はすぐに理解できよう。また現代英語で 'borough' は都市部の「区」を意味する。

エクスマス、ウェイマス、ダートマス、エイヴォンマスなどの「マス」は 'mouth' であり、これは「河口」を意味する。それぞれ順にエクス川、ウェイ川、ダート川、エイヴォン川の河口に位置している。そのエクス川のほとりにローマ人が建造した城下町が「エクス・チェスター」つまり現在のデヴォン県庁所在地エクセターだ。有名な港町ポーツマスが「港」と「河口」が合わさって成立した地名であることは想像に難くない。一方イーストボーン、パングボーン、セルボーン、シャーボーンなどの「ボーン」は「小川」が原義である。ノーベル賞作家ウィリアム・ゴールディング（正しくはゴウルディング）の小説『ピラミッド』は架空の田舎町スティルボーンを舞台とするが、そこには文字通りの「淀んだ小川」が流れており、それが因習に囚われ腐敗した田舎町における淀んだ人間関係を象徴しているのだ。

ハンティンドン、ウィンブルドン、スウィンドンなどの「ドン」は「丘陵」を表す 'down' が変化

したものであり、これらの町はみな丘の上、もしくは中腹にある。ただしロンドン（正しくはランダウン。しかし慣用には勝てない）は例外。これはローマ人の時代に「ロンディニウム」と呼ばれていたのを英語的に発音したものだ。ロンディニウムの語源までは分かっていないのだが、ロンドンが丘の上でないことは誰でも知っている。尤もハンティendonはごく平らな沼沢地帯の、他より標高がほんの少し高いところにあるに過ぎないのだが、一方スウィンドンなんて日本語に直せば「豚が丘」ということになってしまう。「ドン」が 'down' であるのと同様ウェストン、ティヴァトン、トントンなどの「トン」は 'town' であるが、これは古期英語で「囲いを施した私有地」を意味する。現代英語のような「町」の意になるのは中期英語の時代以降である。例えばマイケル・ポンドの童話『くまのパディントン』で知られるロンドンのパディントンは、「パッド氏の囲った土地」に由来する。ここでの「パッド(氏)」と「トン」の間に来る 'ing' は所有を表すものであり、レディング大学がある街レディングは「赤い人たちの(土地)」ということである。「赤い」のはおそらく顔が髪であろう。この街の名前はことによると「レディントン」になっていたかも知れない。大学院時代の友人で、レディング大学というのは 'reading' 即ち講読ばかりを専門的に教えてくれる大学だと思っていた奴がいる。しかしもちろんレディングを含めてあらゆる大学というのは、切り売りされた知識の断片或いは情報処理など手先の技能ばかりを身につけるところでは決してなく、最終的には学問の方法（即ちその大部分は本の読み方）を学ぶ場であって然るべきなのだから、彼の「解釈」もあながち間違っていたとは思えない。

語尾に 'ham' が付く場合、大抵その'h'は発音されず直前の子音に「アム」をつける。フラム（「フルハム」ではない）、プロクサム（「プロクスハム」ではない）、ニューナム、ラヴェナムなどがそれである。この場合の 'ham' は 'home' の古い形であり、「家」「拠点」を意味する。現代英語で 'village' よりも小さい「村」（独自の教会を持たず、近隣の

village)に従属する集落)を意味する 'hamlet' にこの古英語の痕跡を見ることが出来る。パーミングム、バッキンガム、ノッティンガムなどに見られるように、所有の 'ing' と併用され「-インガム」の形を取ることも多い。またハンプトン、ノーサンプトン、サウサンプトン、オウカンプトンのように、「ハム」と「トン」が同時に使われることも少なくない。多くの場合、'ham' と 'ton' を連続して発音すれば自然にそうなるように、間に 'p' 音が挿入され 'hampton' になる。

イングランドをある程度北上すると、「ビー」が最後につく地名が目につくようになる。あの楕円形の玉を使った球技の発祥地であるラグビー、競馬の発祥地であるダービー、ドラキュラの古城があるウィットビーなどである。この「ビー」は当時のスカンディナヴィア語で「農地」「村」もしくは「要塞」を意味する。この種の地名が北部に多い理由は、スカンディナヴィア半島のデイン人たちが9世紀頃北からブリテン島に攻めて来て、およそラグビーの辺りまでしか南下しなかったということだ。したがって、彼らが名付けた土地もこの辺りまでしかない。スコットランド最北端に近い町ウィック、ロンドンよりも北極圏の方が近い最果てのシェットランド諸島(シェットランド・シープ・ドッグで有名だが、実際この島に行ってもこの種類の犬はまず見かけない)における唯一の町ラーウィックなどの「ウィック」は同じくスカンディナヴィア語の「湾」に由来する。ただしベリック(スベリング上は「パーウィック」と読めるが、実際は 'w' の子音を発音しない)、チズィック(同様に「チズウィック」ではない)、ケズィック、ウォリック或いはオールドウィックなど、もっと南にある「(ウ)ィック」が付く地名の場合、「(ウ)ィック」は「住居」「(特定の目的に使用される)建物」の意である。英語で 'ch' のスベリングは「チ」と「ク」(共に無声音)の二通りの読み方があり得るが、そうなると 'ch' の綴りが 'k' に変化することもあり得る。従って、チズィックとケズィックは同じ地名のヴァリエーションであり、前者はロンドン西郊にあり後者は湖水地方

にあるが、共に「チーズを作る農家」を意味する。このように 'ch' と 'k' が入替可能であれば、当然「(ウ)ィック」はイプスウィッチ、サンドウィッチ、オールドウィッチのように「(ウ)ィッチ」にもなる。この場合子音 'w' が発音されることが多いが、一方天文台、世界標準時で知られるグリニッジ、オランダへ船で行くときの港があるハリッチ、高名な小説家を多く輩出しているイースト・アングリア大学があるノリッチなどのように、'w' が発音されず 'ch' が有声音化して「ィッチ」となる例も多い。



## 第5回 外国語コンテスト

### 英語部門

1999年度外国語コンテスト英語の部は11月26日金曜日、午後4時半から110番教室にて開催された。99年度は前年度の倍に相当する26組の参加があり、長時間に亘る本選となった。審査員は椋山女学園大学助教授David Pomatti氏と本学名誉教授池稔氏の二名。司会進行は本学助教授片岡邦好氏。

前年度までと変わって今回は「英文の暗唱（指定課題、または自由選択）」と「英語の歌（曲目自由）」のいずれかの選択となり、それが参加者増加の一因となったと思われる。指定課題はShel Silversteinの絵本The Giving Tree（6名が選択）、英語テキストの古典とも言えるPolite Fictions（5名が選択）、William Wordsworthの詩'I Wandered Lonely as a Cloud'（1名）、Charles Chaplinの演説The Great Dictator（1名）など、多様なジャンルに亘る。詩や演説よりも童話、論説文の方が表現が容易だったためか、多くの参加者に選ばれたようである。

審査の結果は第1位が'How Far Can English Go?'を暗唱した現代中国学部3年（当時、以下同様）松本修治（敬称略、以下同様）、第2位が同点で'Doctors Without Borders Wins Nobel Peace Prize'を暗唱した法学部1年吉田あかり、'If We Hold on Together'を歌った法学部3年川内まりこ、第3位が'Just Can't Wait to be King'を歌った現代中国学部2年小貝洋子であった。上位入賞者には奨励金が、またすべての参加者にはコピーカードが贈られた。

（安藤 聡）

### ドイツ語部門

例によって例の、否否否、恒例の名古屋語学教育研究室主催第5回外国語コンテスト・ドイツ語部門本選が1999年12月10日（金）203番教室で開催された。正式には第1回と言うべきかもしれない。というのも、かつての「名古屋外国語研究室」が「名古屋語学教育研究室」に名称変更になったのだから。ともかく例年のごとく会は盛大に催され、クラスごとに開催された予選会参加者200名余（多分に教員による強制脅迫の匂いがしないでもない）から選抜された本選出場者22名によって、優秀賞が競われた。

課題は、社会科学を学習するものにとっては必読書とも言うべき（かつて大学生ならば誰もが競って読んだ）精神分析学者・社会学者として名高いエーリヒ・フロム の名著『自由からの闘争』（Die Furcht vor der Freiheit）の有名な冒頭の一節の朗読である。本来なら例年のように審査委員長をドイツ人の先生にお願いすべきであるが、残念ながら昨年までお願いしていたクボク=ミュラー先生が本国ドイツに帰国され、（役不足という点で参加者にとっては多少不満はあろうが）やむを得ずわたし一人で審査にあたることとした。

Im Mittelpunkt der modernen europäischen und amerikanischen Geschichte steht das Bemühen, sich von den politischen, wirtschaftlichen und geistigen Fesseln zu befreien...で始まる課題文は、人間の自由への闘争過程がやがては抑圧の過程へと転化するヨーロッパ・アメリカ近代史の歴史的逆説を明らかにする。審査は、フロムの主張に底流する感情の変化を如何に表現するか、にポイントが置かれた。ドイツ語の一語一語の発



音には幾分難点があったものの、優秀者に選ばれた出場者はいずれもこの感情表現において優れていたと言える。

厳正な(おそらくは?)審査の結果、優秀者には第1位に平野堅志君(経営学部3年)、第2位に徳野有香さん(法学部2年)、第3位に福田秀樹君(法学部1年)が選ばれ、3名の優秀者は12月17日(金)開催の表彰式において田川光照研究室長より武田信照新学長の表彰状と賞品が授与された。表彰式に続いて発表会が行われ、第1位の平野君が課題文を朗読し、多数の参会者から喝采を受けた。

今回のコンテスト開催にご協力下さった教職員の方々、果敢に課題文に挑戦し、予選・本選に出場してくれた学生の皆さんにここに改めて心よりお礼を申し上げます。

(竹中克英)

## フランス語部門

フランス語コンテストは平成11年12月6日に行われた。

課題は、17世紀当時の民間に伝承されていた童話を集めたシャルル・ペロー(1628~1703)の『コント集』中の有名な童話「赤頭巾ちゃん」、その数節、おばあさんに化けてベッドで待っている狼と見舞いにやってきた赤頭巾ちゃんとの掛け合いの部分の朗読である。出場者たちのフランス語の発音の正確さは無論のこと、掛け合いをいかに自然にそれらしく表現しているかが、審査員の審査注目点であった。

毎回のことではあるが、lとrとの、また、bとvとの発音上の区別が初学者のにとっては大きな問題である。特にrとvの発音は日本語に近い音がないから、発音においては意識して練習しなければならない。日本語にない複母音ouをうまく発音できるか、鼻母音enとinとの違いも正確か。

狼の作り声と赤頭巾ちゃんのかわいらしい声とを特にそれらしく目立たせて表現できた者はいなかったが、慎重審査の結果、全15名の出場者中次

のとおり入賞者が決定した。

第1位 98M3356 山下 峰冬

第2位 99M3107 岡本 友里

第3位 99M3149 内山 裕章

(河原誠三郎)

## 中国語部門

第5回外国語コンテスト「中国語部門」は、1999年11月25日(木)午後1時より、213教室にて開催した。今回も昨年同様、「法学部・経営学部部門」と「現代中国学部部門」とに分けて実施した。

コンテストの実施方法は、「法学部・経営学部部門」では、あらかじめ渡してある課題文を朗読してもらおうという方法をとった。「現代中国学部部門」では、課題文の朗読に加え、今回から新たに、自らが作文した中国語の文章を暗唱するという、自由課題部門を設けた。自由課題部門に参加した学生の中には、今回のコンテストをステップにして、外部のスピーチコンテストに挑戦し、優秀な成績を収めた者もいたとのことである。

ただ、今回は、宣伝不足であったためか、参加者が「法学部・経営学部部門」では5名、「現代中国学部部門」では8名と、昨年に比べ減少してしまった。次回のコンテストには、積極的な参加を心から期待したいと思う。

なお、入賞者は以下の通りである(学年は実施時のもの)。

「法学部・経営学部部門」

朗読部門 課題文は「日本のカラス」

第1位 沓名 俊作 (法学部 3年)

第2位 菅野 浩子 (法学部 2年)

第3位 西土 久美 (法学部 2年)

「現代中国学部部門」

朗読部門 課題文は「凍児子」

第1位 森 謙二 (現代中国学部 3年)

第2位 小貝 洋子 (現代中国学部 2年)

## 自由課題部門

第1位 松井 正樹 (現代中国学部 3年)

題は「難忘的旋律」

第2位 渡部 玲子 (現代中国学部 3年)

題は「方言的作用」

(矢田博士)

## 韓国・朝鮮語部門

第5回外国語コンテスト「韓国・朝鮮語」は11月25日午後1時から名古屋校舎110教室にて開催された。参加学生17名、審査員2名(陶山・常石)、今回も車道校舎から3名の参加があった点は特筆すべき点であろう。

朗読課題は「明日香村—古代の息吹を今も伝えてくれる(中級用)」、「近ごろ韓国語を勉強しています(初級用)」。

昨年度('98)の課題文に比べかなり難しいものを選んだにもかかわらず、発表者17名の努力の跡がありありとうかがえた。審査の結果は以下。

1位 栗田 諭 (97・現代中国学部)

2位 林 裕紀 (98・法学部)

3位 久野 幹太 (98・法学部)

入賞者以外にも池田憲一郎君(98・法)、横尾俊幸君(99・車道・法)などの健闘が光った。また酒井恵美子さん(98・車道・法)のように諸君よりはかなり”お姉さん”である方の参加と健闘も印象に残った。

## 日本語部門

(常石希望)

第5回外国語コンテスト、日本語スピーチコンテストの部は、11月26日(金)午後開催された。昨年同様、「留学生から見た日本」というメインタイトルのもと、16名の参加学生がそれぞれのサブタイトルをつけ、体験を思いを込めて発表した。来日以来の苦しい日々を思い出し、思わず感情が激する

場面も合ったが、留学生にとっては、日頃の自分の思い、考えを伝えるいい機会だったにちがいない。同時に、徴収の日本人学生たちにとっては、耳の痛いことも多く、異なった視点から日本を捉える良い機会となったことだろう。

審査は、「日本語」担当の大西、山本委員、それに、同世代の眼からの評価を加えるべく、法学部、現代中国学部からの三名の学生によって行われた。入賞者は次の通り。(1位、2位のスピーチは後に掲載する。)

1位 李 勤芬(中国)(法学部2年)

2位 曹 榮子(韓国)(現代中国学部2年)

3位 呉 賢貞(中国)(現代中国学部2年)

(山本雅子)

### 《日本語コンテスト入賞作》

第一位 日本のおきなところ嫌いなところ  
法学部2年 李 勤芬

留学生として日本に来てからもう一年半になりました。今名古屋に住んでいます。日本の好きなところといえば一番良いのは環境がきれいだと感じるところです。それはどこへ行っても綺麗だからです。

この中で一つシンボルは、家庭で燃えるゴミと燃えないゴミを別々に分けて、曜日によってそれぞれの捨てる日が決まっているということです。そして大きなスーパーで缶や瓶などを全部回収してリサイクルしています。

また空気とか山とか自分の国に比べると綺麗だと思います。水道のお水でもそのまま飲んで大丈夫です。そういうことは今の上海ではどうしてもそこまでいけないと思います。

もう一つ、日本人は大体歩きながら何も食べません。一方国で自分が住んでいたところの人々は歩きながらジュースを飲んだり、色々な物を食べたりしています。だからゴミがどこでもいっぱいあります。日本ではみんなできるだけ環境を守っています。緑も多いです。こんな所に生活して私

は好きです。

日本で嫌いところは若者のお洒落です。最初一番深刻な印象を受けたのは髪の毛を染めるということです。普通に髪の毛を染めるのは構いません。自分の国でも若者達が髪の毛を染めているそうです。大体薄い茶色だそです。でも日本の若者達は変な色に染めます。例えば赤、青、ピンク、白もあります。とても変だと思います。そしてたくさん女子高生の厚化粧とか、男の子達がピアスをつけるとかという変なことです。

今年夏は厚底というサンダルを履いていました。この種類のサンダルは特に底が高いですが、大体十四、五センチぐらい高さです。もしこんなサンダルを履いたら、歩く時はとても不便だと思います。ちょっと気をつかなかったら転びやすい、とても危険だと思います。でも若い人には人気があります。しかし私にはどう考えたって理解できません。日本の若者達はなんで自分国の伝統の服装を捨てて、別の国の若者のお洒落を真似するのでしょうか。こんなお洒落は私は嫌いです。日本の若者達はもっと自然なお洒落をしたほうがいいと思います。

## 第二位 日本人のコミュニケーション 現代中国学部2年 曹 榮子

本当に日本人は中国や韓国の人より自分の意志を伝えるのが下手だと思う。元々、日本語自体がそうなのは分かるけど、外国人にとってそれを理解するのはなかなか難しい。

例えば、「今度遊びに来てください」といわれたら本当に行ったら迷惑だと思われる。このことについて日本人の友達と話し合った事がある。彼らは、それは全然おかしくないはない話だと言った。彼らが言うには、日本人には本音と建前があると言う。あんまり仲良くない友達でも久しぶりに会ったとき挨拶として「今度遊ぼうね」とか「今度飲もう」などの言葉を言うと言った。私は最初、「今度遊びに来てください」と言うのが挨拶言葉である事を知らなかった。もちろん韓国人にも本音と

建前がある。しかし日本人のように激しくはない。だから日本人に近づくのは難しい。

私が大学に入って初めての頃だった。みんな新しい友達を作ろうと必死だった。私も同じだった。最初初対面のときは電話番号を教えたり教えられたりして、その他にもお互いいろんなことを聞いたりとてもいい感じだった。しかしそれはそれほど長くは続かなかった。授業が異なるためかだんだんお互い話さなくなり挨拶程度の関係になって最後には挨拶もなくなる程度になった。最初はそう言う関係がイヤなので自分から積極的になって会う度に嬉しく話し掛けたりしたがあんまりにも反応がなかったので私もそう言う努力をしなくなった。会ったら目をそらしたり他の人と話したりしてお互いを避けていた。何が原因なのかは分からない。喧嘩をしたわけでもない。私はこのことを私に問題があるか、または外国人に対しての抵抗感だと思った。しかし日本人の朋たちに聞いてみるとそうでもなかった。自分たちも最初は仲良くてもあんまり会わなくなったら私と同じような段階を踏んで最後にはお互い無視するようになったと言った。もちろんそれには個人差があると思う。しかし韓国ではこんな経験がなかったので不思議だと思った。

韓国人と中国人はノリがいいと言われている。しかし日本人も負けてはいないと思う。ただ違うのは、日本人は飲む時だけ盛り上がるということである。飲むときは、誰が見てもみんなとても仲良く友達に見える。しかしその次の日になるとみんな前と同じく何もなかったようなふりをする。これについては、最初本当に抵抗感が強かった。韓国では飲んでみんなでそこまで盛り上がりたり仲良くなったりしたら親友までとはいかないけれど決して日本のように知らないふりはしない。

何が本音なのか分からない。結局、私も知らないうちに日本人との見えない境界線が生じてしまう。今はすっかり慣れてしまった。時々こう言うことに慣れてしまった自分にびっくりする。韓国に戻ってもこうだったらどうしようかと思う。人としての「情」と言うのがなくなるような気がす

る。

私は「せっかく日本に米たので日本人の友達がいっぱいほしい」と考えていた。しかし今は、「どうでもいい」と言う考えのほうが強い。私も今まで努力はしたのだがその努力はその時だけだった。だから今はあきらめるようになった。もちろんこれは日本にいる限りである。これは日本の民族性だと思うので、これを変えることは、なかなかできないと思う。しかし、外国人ともっと良いコミュニケーションをしたければ、この民族性は変えたほうが良いだろう。少なくとも若者たちは自分の考えていることと言うことが一致するべきである。これが定着したら私のように「日本人の友達なんてどうでもいい」と考え始める外国人は出なくなるでしょう。



名古屋語学教育研究室のホームページを開設しました。

アドレスは

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~goken/>

## '00 公開講座「言語」のご案内

愛知大学言語学研究会

(後期)

愛知大学東道校舎3号館3階332演習室  
午後2時半～4時半

2000年

9月16日(土)

「数学からみた言語」

河田 賢二 (愛知大学経営学部助教授)

10月14日(土) (2講義開講)

「学習文法とコーパス」

塚本 倫久 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

「明治時代と言語—新しい言語をめぐる—」

知念 忠真 (愛知大学名誉教授)

8月11日(土) (2講義開講)

「曹叡の詩歌について」

矢田 博士 (愛知大学経営学部助教授)

「星の王子さま」を視文・異訳対照で読む

高橋 秀雄 (愛知大学国際コミュニケーション学部助教授)

9月12日(土) (2講義開講)

「大学における中国語教育の再検討」

安部 信 (愛知大学現代中国学助教授)

「日韓、ことばと文化比較論(その一)—「人間関係性」という概念について—」

常石 希望 (愛知大学法学部教授)

2001年

10月20日(土) (2講義開講)

「学期のことば」

片岡邦好 (愛知大学法学部助教授)

「大学における韓国・朝鮮語と中国語の教学の問題について」

陶山信男 (愛知大学名誉教授)

### 〈編集後記〉

アジア特集を組んだところ、早速多数原稿を寄せていただいた。アジアには過去を重く引きずった問題が数多く存在することを改めて痛感した。

人間の歴史は、いわば争いの歴史である。そしてその争いが世界規模で行われたのが今世紀であった。世界の富を巡り2つの大戦が起り、あるいは自由か平等かの理念を掲げて50年には朝鮮戦争がはじまった。そして東西の冷戦は91年まで続いた。

帝国主義日本がアジア諸国に与えたさまざまな災禍は、今なお人々を苦しめている。「旅人打鐘」は強制徴用された元従軍慰安婦の演ずる悲しい一人芝居が観客のたいなる同情を誘ったことを報告してくれる。小説『太白山脈』は、解放後すぐに分断された朝鮮半島での冷戦時代、理念の対立から同胞間で殺戮が行われていた事実を取り上げ、読書界の話題をさらっている。

独裁政治が民衆に不幸をもたらすことは明白である。不幸は人権抑圧にはじまる。アウン・ミン・ニウ先生の国ミャンマーでは、本来民衆に奉仕すべき公務員・軍隊が民主選挙の結果を踏みにじって政権を奪い取り、アウン・サン・スー・チーさんらによる政権返還の要求を無視、居座り続けている。長い一党独裁時代のテロの不幸を乗り越え、2回目の「民選総統選挙」が行われた中華民国(台湾)は、独裁大国中華人民共和国の脅しを受けている。

冷戦は残され、アジアの政治危機は終わっていない。繁栄の利益を分かち合い、自由か平等かではなく、自由も平等も両輪いっばいに抱え込んで笑顔一笑するアジアが見られるのは、いつの時代であろうか。

(編者)